

人物

みのかも

①

神保朔郎

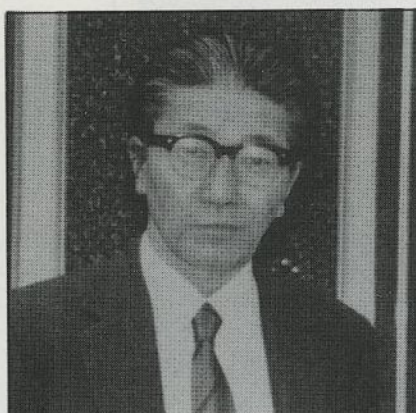
郷土の教育と歴史研究に尽力

教職にあつては教え子を心から愛し、一方、市の誇るべき文化遺産である『美濃加茂市史』を編さんした神保朔郎は大正一三年二月八日、富山県上新川郡大久保町に生まれた。父・喜久は郡是製糸株式会社勤務、その関係で朔郎は小学・中学時代は各地を転々とした。

京都府立宮津中学校を卒業後上京し、国学院大学に進学するが結核のため中退し自宅にて療養する。昭和二十一年春、父が古井町上古井の郡是製糸美濃工場長として着任、二年後定年退職し一家は太田町下町に家を買って転居する。

療養生活七年、漸く病癒えた朔郎は、岐阜大学臨時教員養成課程を修了し、古井小を振り出しに二五年間小学校教諭として奉職した。先生は子ども達を人一倍愛し、信望も厚かった。温和な人柄のなかに一点の厳しさをもつ先生を慕ってくる後進を親身になって指導した。父が太田の家を買う時世話になった岐阜県歴史学の草分けである林魁一翁との出合が、後年先生を

歴史と結びつけることになる。蜂屋小へ転勤後、「蜂屋の歴史を知りたい」という子ども達のために、郷土史研究家の川合為一先生（蜂屋町下蜂屋）の研究ノートを借りて、それを基に史料調査を進め、昭和四三年から四年間かけて、手



略歴→大正13年(1924)京都府に生まれる。昭和26年、岐阜大学臨時教員養成課程を修了後、古井小学校へ赴任する。以後、長年にわたり小学校教員として尽力する。その間、市内の歴史・文化財研究に情熱を注ぎ、『美濃加茂市史』3巻を編さんする。昭和60年7月6日没、享年61歳。

くなるよ
うな大事
業であつ
たが、持
ち前の強
い責任感
をもつて
やり遂げ
た。

先生は文化財に対する造詣も極めて深く、岐阜県文化財巡視員、美濃加茂市文化財保護審議会委員などをつとめた。又、昭和四九年から十年間にわたり、美濃地方に多くの会員を持つ民間の研究団体「美濃文化財研究会」の事務局として会を主宰、毎月の会報を手書きで発行し、草の根の郷土史の発展に尽力した。

五五年の『市史』完結後、先生は再び古井小学校で教壇に立つが、五八年三月に退職し、市中央公民館において古文書解説講座をはじめとする生涯教育活動の指導者として活躍していた。そんな先生を突如襲ったのは悪夢のような九・二八災害であった。太田本町の自宅は約二層の泥水に浸る。それまでの研究成果だった資料は見るも無惨な姿と化し、ほとんどが処分せざるをえなかった。かううじて廃棄をまぬがれた古文書や絵図の泥を丁寧に拭きとり、わが子にいたわるとともに一枚一枚剥がしながら乾かしていた先生の姿が印象的であった。民衆の生きざまを表す史料は先生にとってまさに心のよりどころであった。

資料を水に流された精神的打撃は極めて大きく、復旧にともなう疲労も重なって先生は病に倒れ、六十年七月六日、ついに帰らぬ人となった。六十一歳の若さであった。



著作の数々

書き謄写版印刷の「蜂屋の歴史」を製本し子ども達にくばる。その実績が認められて昭和五十一年、市制施行二十年を記念して『美濃加茂市史』の刊行が計画されたとき、編さん室長として迎えられ、編さん作業が始まった。

先生はこの『市史』を「従来のいわゆる郷土史がともすると陥りやすかったお国自慢、為政者中心の

弊を避けて、『地域の住民が主人公である』真の郷土愛に立脚した地域史」と性格づけ、「これまで埋もれていた多くの史料を発掘することにより、直接、祖先たちの声が聞こえてくるような市史」(『市史』通史編あとがき)をめざし、まさに血のじむような努力で、平易な表現でありながら極めて高い水準の内容にまとめた。収集、整理された史料は三千数百点、史料編「民俗編」「通史編」三巻で合計三千ページに及ぶという気の遠